紹　介

●日本中世史論考　大森金五郎著

鎌倉時代史に造詣深い著者が多年の研究十六篇を集めたものである。由來論文集は、纒まれる著作に比して渾然たる滋味に乏しいが、併し特殊問題についての諸考察にも尙ほ連れる高峯の如く關聯あるものあつて特殊の興味を感ずるものがある。卷頭の『武士道の源流及び其の將來』は武士道についての種々史料を涉獵し、その特性を明かにし西洋騎士道との比較にまで及んだ八十頁に餘る長文であり、『鎌倉文化に就いての考察』は從來ともすれば無視されやうとした武士の京都文化模倣の一面を指摘したもの『足利學校及び金澤文庫について』は、平泉博士の考察も斯かる先人の研究の再批判より出發したと見る時、興味あり『金澤文庫追考』は主として前田家所藏の文庫本、古語拾遺の謄寫本により文庫を中世精神史上何等貢獻する所無しとの說に反證を提出したものである。外に『元弘三年の鎌倉入り』『鎌倉幕府舊跡考』等にも著者の研鑽が知られるであらう。尙附錄として添へられた吾妻鏡要目八五頁は同書に對する索引的な效用を示すものである。（菊判本文四五二頁附錄八五頁　四、三〇　東京四海書房）

●三種神器觀より見たる國民精神發達史　加藤　仁平著

著者は日本教育思想史に專心さるゝ新進篤學の士、その研究の一端として、我國國民精神の上に特殊の意義をもつ三種神器觀の史的考察を試みられたものである。從來研究對象の外に置かれてゐた然も眞實なる日本の認識には根本的なものであるとするこの神器觀の發展に於て國民精神の展開を見、更にそれが日本主義教育論の上に持つ意味をたづねんとしたのである。この書に於て何人も著者の眞摯な態度に敬意を表しその學の大成されん事を期待するであらう。全篇五章に分かち、中世に現れた純日本精神の甦生に伴ふ神器觀の勃興より南北朝時代を經て近世に至る興味多き展開を跡づけ、附錄として、三種

神器を〝徴〟したる道德思想の展開、本居宣長の名歌「敷島の大和心」についての二篇が添へられてある。國民教育に携はる人は勿論「日本」に就て多少とも思を潜める士の一讀すべきものであらう。（菊判二一八三頁　東京教育研究會發行　定價二、五〇）

●名家筆蹟考　森本　繁夫編

南北朝時代より最近に至る物故四百名家の筆蹟四百二十九點を凸版網版として編纂したものである。その內容は諸方面に亘り網羅されてゐるが、中には左迄重要と思はざる人物をまでも含める半面遺すべからざるもので採擇に漏れてゐるものも少くないのは、著者所藏のものを主とした點より致方あるまい。それにしても遺は有數の短册蒐集家として聞えた著者ならではと頷かせるものがあつて、多方面の名士の風格を窺ふに便利であり後に附加された簡明な解說は本書の觀賞に役立つ所がいであらう。（四六倍判アート紙一七〇枚解說九二頁　大阪活版所發行　定價和裝一〇、〇〇洋裝八、〇〇）〔以上藤〕

●近世城下町の研究　小野　均著

近世文化の母胎として都市生活の發展を考察することは甚興味がある。而も我國に於ける近世都市はその大部分を城下町として成立、發達したから近世都市の研究は自ら近世城下町をその中心とせねばならぬ。然るにこの問題はその材料が全國に散在し而も頗る多數であるが爲に近世文化の考究に從ふ人々も敢てこれに着手しなかつたところである。著者小野氏はこれを慨し拮据經營廣く搜り深く思ひてこの篇を成した。その勞察するに餘りあるところ筆を近世都市の勃興に起し次いで城下町の成立を說きその組織を論じその沒落に結んで居る。從來この方面に於ける研究は絕無とはいへないが多くは部分的のものであり未だ全體として綜合的に觀られたものは無かつた。その點に於て本書は最初の研究であり而も大きな效果を擧げたものとして深くその勞を謝すべきである。本書が主として取扱へる經濟的方面以外に、他の文化諸相が攻究せられ、城下町の特質を更に明かにして、近世文化の簡明に資せらるれば、幸の大なるものがある。（菊判二九八頁　東京至文堂發行　價二、五〇）